

## <小論文>

### 賀川豊彦再見 —高等学校『倫理』教科書の中の賀川豊彦—

関西大学非常勤講師 浜田 直也

#### はじめに

賀川豊彦<sup>かがわとよひこ</sup>(キリスト教社会主義者、1888～1960年)は、『詳説日本史B』(山川出版社)には、大正デモクラシー期の社会事業の開拓者としてその名前が記されてきた。近年に至って、『倫理』(第一学習社)の教科書にも、その名前と業績が紹介されるようになった。

ところで、賀川は明治42(1909)年に神戸市葺合区(現中央区)にあった俗称「新川」と呼ばれたスラム街へ入居し、ここでのキリスト教の伝道と貧民救済運動に取り組み、人々から「貧民窟の聖者」と讃えられ、正義感に燃える青年・知識人から称賛を受けたという。

とりわけ、賀川が、スラムでの実体験をモチーフにして描き出した自伝小説『死線を越えて』は、大正期の最大のベストセラーになっている。この表題に与って出征兵士が財布に“四銭”を入れお守りにして戦場にむかったエピソードが巷間<sup>ちまた</sup>に残されている。

例えば、第一学習社の『倫理』(平成26年度版)には、次のように記されている。

神戸のスラム街で伝道と救済活動をおこなった賀川豊彦は、労働運動や消費組合運動に尽力し、晩年は世界連邦運動にも参画するなど、さまざまな社会事業をてがけた。

一方、山川出版社版『倫理』には、賀川についての記載はないが、副教材『倫理用語集』には、彼の生涯と業績が簡潔にまとめられている。しかし、彼が戦間期「第一次～第二次世界大戦」から戦後にかけて果たした社会運動での先駆的役割は語り尽くせていない。

そもそも、賀川豊彦に拘わる紹介は、日本史の分野では、古くから登場している。例えば、歴史教育研究所編『日本史事典』(旺文社、1971年)には、次のようにある。

プリンストン大卒、神戸の貧民窟で伝道。また友愛会幹部として川崎・三菱造船所の争議を指導。消費組合・農民組合運動に活躍。海外にも伝道。主著『死線を越えて』

賀川を育てて宗教家に育て上げたのは、アメリカ人の宣教師ローガンとマヤスである。賀川は、彼らの支援で1914年に渡米しプリンストン神学校に留学し、1916年神学士(B.Dバチュラー・オブ・ディフィニチィ)の称号を授与されている。

因みに、賀川が師と仰いだ鈴木文治<sup>すずきぶんじ</sup>(1885-1946年)ですら、『日本史B』の教科書には大正デモクラシー期の重要人物として記されているが『倫理』には取りあげられていない。

賀川豊彦は、歴史家の間の評価では、毀誉褒貶の多い人物である。しかし、彼が、大正初期から昭和40年代にかけて、国内外の空間で展開し結実させた社会改革運動の業績とその思想は他の同時代人には見受けられない。

本稿は、その中でも労働組合運動、医療福祉運動、世界平和運動に焦点を当てその歴史的意義を再検討し、高校社会科の授業のなかで、「賀川豊彦」を取りあげる際の指針とする

ことを目的とするものである。

## 第1章 「貧民街の聖者」

学校図書に関して言えば、賀川豊彦に言及している書籍は現時点では少ない。その中にあって、山川出版社の『倫理用語集』（2014 年度版）には、以下に示すように賀川について比較的詳細に解説がなされている。

神戸に生まれ、キリスト教の伝道者になり、貧民街に住んで隣人愛の精神のもとに伝道と人々の救済活動を行い、「貧民街の聖者」と呼ばれた。渡米してキリスト教の神学を学び、帰国後は民衆の貧困問題を解決するために労働組合運動や農民運動、生活協同組合運動に取り組んだ。

『倫理用語集』には、賀川豊彦の経歴が簡潔にまとめられ文章化されている。「貧民街の聖者」という言葉から、貧民の救済者としての面目躍如たる彼の人物像が伝わってくる。

賀川豊彦は、1909 年、神戸市葺合区の俗称「新川」とよばれたスラム（貧民窟：貧民街）の長屋の表三畳、裏二畳の狭い部屋に移り住んで、キリスト教の伝道と貧民救済運動のため献身的な生活をはじめた。

賀川がその貧民救済活動を描いた自伝小説『死線を越えて』（改造社、大正 9（1920）年 10 月 3 日刊）が発刊されるや、『死線を越えて』は、戦前だけでも部数が 400 万部を超え、しかも 10 数カ国語に翻訳されたベストセラーとなり、彼は一躍時の人になった。『死線を越えて』（三部作）の中には、新見栄一の名前で彼自身が主人公として登場している。

ところで、賀川の文学的評価は、日本国内に止まらず世界的にも高く、「ノーベル文学賞」の候補に 2 度（1947・1948 年）なっている。その際の競合者は、フランスの文豪アンドレ・ジット（Andre Gide 1869-1951 年）とイギリスの詩人 T・S・エリオット（Tomas Eliot 1888-1965 年）であった。

賀川の膨大な著書は、武藤富男が編集した全集本 24 巻（キリスト新聞社）に編纂されている。しかし、実際には、全集には漏れ落ちた貴重な文章が多くある。今、彼の文学全般を再読すると、その人格に潜む鋭敏な感性から、彼の詩人としての一面が見えてくる（註 1）。

なかでも、賀川の第 1 作目の詩集が、『涙の二等分』（福永書店）である。この詩集の奥付には、「一九一九・一〇・六 神戸貧民窟にて」とあり、大正 8（1919）年に認められたことがわかる。その詩に詠みこまれたストーリーには、彼がスラムに入所した際に衝撃を受けた悲惨な情景が影を落としている。

そこで、貧民街での悲惨な体験を題材とした『涙の二等分』が海外でどのように翻訳され他国に広まったのかを検証することにする。

まず、詩集『涙の二等分』の中でも、書名にもなった詩「涙の二等分」の原文を紹介する。この詩の背景は、当時、スラムの住人が商売としていた“貰い子殺し”に題材をとっている。“貰い子殺し”とは、不義姦淫の結果など、わけあって育児放棄された私生児・幼児を、貧民が養子縁組して貰い受けてわざと餓死させて報酬を取る悲劇的な生業なりわいである。

賀川は、警察に保護された‘おいし’という名の“貰い子”を引き取り、自ら育てようと

するが、既に嬰兒は衰弱していて彼に抱かれて死んでいく。「涙の二等分」には、‘おいし’が賀川に抱かれて死んでいく劇的な場面が感動的な言葉で表現されている。

おいしが唾（筆者注：言葉が話せない人）になった。泣かなくなった。眼があかぬ、死んだのじゃ、おい、おい、未だ死ぬのは早いぜ、わしは葬式料がないんだぜ、南京虫が一脛嚙んだーあ痒い！

おい、おいし！ おきんか？ 自分のためばかりじゃなくて ちっと私のためにも、泣いてんか？ 泣けない？

よし……泣かしてやろう！ お石を抱いて、キスして、顔と顔とを打合せ、私の眼から涙汲み、おいしの眼になすくつて……「あれ、おいしも泣いているよ あれ神様 おいしも泣いています！」

賀川は、スラムに棲む貧民達の無智で非道徳で悲劇的で矛盾だらけの現実を、不義の子を引き取り態と餓死させ手数料を取る「貰い子殺し」に焦点を当てて詩で描写している。

ところで、賀川の文学に対する海外での関心は、アメリカでは1930年代から存在していた。賀川の詩『涙の二等分』の英訳を掲載した雑誌に、アメリカのコミュニスト系文学雑誌『New Masses』（新下層階級、1926-48年）がある。

アメリカの社会主義者ジョゼフ・フリーマン（Joseph. Freeman 1897-1965年）等が編集者となり、ニューヨークで創刊された社会主義寄りの雑誌である。この雑誌に、Lois. J. Erickson 訳、Sherwood Eddy 解説、Julian. Brazelton 挿絵でもって『涙の二等分』が『Song from the Slums』の訳名で掲載されている（註2）。

Why are you quiet, Ishi? Why are your eyes shut, why? Wait oh wait, little sick one, It is too soon to die. Think of my struggle to save you, Will you not stay ' with me? Listen ;Death shall not take you; I have no burial fee!

Cry again, Little Ishi! Cry once more, once more; What will it take to make you wake? For I cannot let you go!

Will she not cry ? I shall make her; Here in my close embrace I kiss her wan lips growing greyer; My drawn face touches her face. Fast are my frightened tears flowing, Falling on Ishis eyes; With her cold, still tears they are mingled, O God……at last……she cries!

英訳詩は、日本の現実に疎いという現実もあってか、原文を膨らましたり削ったりしていて忠実な訳とは言えないが、その心情を描写していて悲劇の劇曲の台詞のように心に響く。

また、賀川の献身的な生き様を表現するフレーズ（phrase:成句）として知られているのが、詩「一枚の衣の使徒」に挿入されていた「一枚の最後に残ったこの着物 神の為めには猶ぬがんとぞ思ふ。」である。「最後に残った一枚の衣服をも、困っている人に与える」という意味のフレーズは、『Song from the Slums』の英訳では次のようになっている。

Stripped thus of all that Thou hast given me, I would give again my all to Thee!

このフレーズには、訳文を担ったロイス・エリクソン (Lois J. Erickson) の賀川の詩に対する熱情が訳語の中にも感じられる。つまり、賀川の文学は、アメリカでは1930年代には、すでに一定の評価を受けていたことの証である。

アメリカの詩人にとって、その詩に社会主義思想を漲らせた作風のプロレタリア詩人としてはカール・サンドバーク (Carl Sandburg, 1878-1967年) が思い浮かばれる (註3)。

賀川が「貧民街の聖者」と呼ばれ世界から注目されるようになるのは、中国での声望も影響をしていると思われる。賀川は、大正9 (1920) 年8月、上海日本人YMCAの夏季講座の講師として初訪中する。その際、彼は初期中国共産党の指導者陳独秀 (ちんどくしゅう) (1879~1942) と会談している。

賀川は、『死線を越えて』三部作の一つの『壁の声きく時』に陳独秀と会ったことを記している。

また、陳独秀も、中国国民党 (党首孫文、1919年) の機関紙『民権日報』に賀川の貧民救済活動を賞賛する文章を寄稿している (註4)。

賀川豊彦先生 (賀川先生は良心的な学者である。彼は、神戸の貧民窟に十数年住んで、貧民救済運動に一途に取り組んでこられた。彼は、二ヶ月前に上海に来られて上海の貧民窟を調査された。) は、大阪での労働問題講演会で、“現在の資本主義の社会では、金銭は生命よりも、はるかに価値有るものとされている。資本家は、富を蓄積するためなら労働者の生命を犠牲とすることを惜しまない。大正六年は最も栄えた時代とされるが、全国で医者が五万人増加しているのに、死亡率もやはり増加している。”と話した。…。私は、無教養な労働者のために給料を増やすべきでないという人が、皆賀川先生があげた事実に注目することを切望する。

陳独秀の文面を読んだ初期共産党幹部の邵力子も、同様の文章を寄稿して、賀川の活動を讃え、貧民救済の視点をもたない資本家側の知識人たちを批判している (註5)。

ところで、ノーベル文学賞作家の大江健三郎 (1935~) は、賀川の詩人としての性格について次のような見解を披瀝している (「信仰を持たない者の側から何ができるか」『賀川豊彦から見た現代』 (註6))。

まず、『涙の二等分』の中で、社会には完全に人間が見捨てられている社会悪というものがあると考えます。彼はこの社会悪を貧しい側の人たちと生活を共にしながら告発していくわけです。同時に、宇宙悪ということも考えます。宇宙全体の中にもヒズミがある。神様が創造されたものにはあるが、その創造の中にもズレがある、そのズレを宇宙悪と言い、賀川豊彦はこの宇宙悪を詩にします。

大江は、「現実生活に即して貧民の子どもの悲惨さを嘆くような表現をとった詩人は賀川豊彦以前も以後もあまりたくさんなかったのではないかと思います」、と締め括っている。

## 第2章 賀川豊彦と世界連邦

周知のことであるが、賀川豊彦は、1954～56年のノーベル平和賞の最終候補者であった。54年の受賞者は、国際連合難民高等弁務官事務所で55・56年は該当者なしである。1959年、アメリカの教会で賀川をノーベル平和賞候補にの推薦運動がおこっている。彼と世界連邦との拘わりに就いて、先述した『倫理』（第一学習社）に次のようにある。

神戸のスラム街で伝道と救済活動をおこなった賀川豊彦は、労働運動や消費組合運動に尽力し、晩年は世界連邦運動にも参画するなど、さまざまな社会事業をてがけた。

文中にある世界連邦とは、ドイツの哲学者カント（Immanuel Kant、1724-1804年）が、その著『永久平和のため』のなかで、国際社会に道徳法則を適用し永久平和のための国際平和を維持する組織として考案された国家連合・世界共和国・世界市民体制の理論が論拠にされている（山川出版社『倫理用語集』）。

ところで、賀川が3回もノーベル平和賞の候補になったのは、彼のスラムでの救済活動と世界連邦運動が起因しているが、その伏線に賀川が1920年代から提唱した「世界国家」の構想がキーワードとして存在している。

そもそも、賀川は、大正時代から「世界国家」の構想を懐いていた。大正10（1921）年に戦前最大の労働争議である神戸川崎・三菱造船所の労働争議（1921年7月）が勃発した際、賀川は争議団の参謀として3万余人の職工を率いてデモ行進を指揮し、ストライキを実施させた。結局、労働争議は、官憲の弾圧によって争議団側の敗北に終わったが、その最中に、彼は労働者こそが全人類連帯の理想である「世界国家」の建設者である、とのスローガンを唱えていた。

実は、賀川の「世界国家」の構想の淵源は、『新約聖書』のイエスの“みことば”と使徒パウロ（?-60年以後）の“ことば”が説く、労働者の神聖が根拠になっているのである。

例えば、『聖書社会学の研究』（日曜世界社、1922年）第四章「イエスの社会学及び社会運動」第一節「イエスの性格と其運動の特質」に次のようにある（註7）。

イエスは自ら労働者—大工—であり、彼の父も亦大工であった。彼はだから生れ付きのプロレタリアであった。イエスは彼自身云っている通り「…人の子は枕する処なき」（ルカ九・五八）無産者であった。

つまり、賀川は、父ヨセフが宮大工であったことから、当然イエスも宮大工であり労働者であったことを根拠にして、そこから労働者を神性視しているのである。

また、『聖書社会学の研究』第五章「使徒時代及びパウロの社会学と社会運動」第2節「使徒パウロの社会思想」には次のようにある（註8）。

パウロは、社会連帯の思想を有ち、又愛の成長を信じ、法律が不用になる迄、社会の成長することを期待したのである。…パウロは上述の外、社会愛の必要を力説した。社会本能（愛）を基礎にせぬ社会運動の無能を彼はよく知っている。それで、彼は単



なる慈善事業の必境徒勞であることを切言した。これはパウロに、深い社会愛があったからである。

社会愛 わが財産をことごとく施し、又わが体を焼かるる為に付すとも愛なくば我に益なし。(『新約聖書』「コリント人への手紙」一)

彼は上述せる如く実に大なる社会思想の懷抱者であった。彼は一面徹底せる世界主義者であったが同時に熱烈な民族主義者でもあった。

賀川は、社会連帯を生む社会本能に括弧書きで愛を挿入している。彼は、社会愛こそがパウロの神の愛(アガペー)であると説く。また、賀川は、『聖書社会学の研究』において、「この社会連帯の考へこそ実にイエスの社会組織の根本法則」とまで記している。

しかし、賀川の『新約聖書』に対する解釈には、多くの点で曲解がある。彼は、資本家が労働者の人格を尊重すべきことを、イエスの労働者観を応用して提唱する。また労働組合運動を理論武装するためパウロ神学を牽強付会的に結びつけているのは拡大解釈と言える。

とはいえ、賀川は、兵器製造に従事する労働者に向かって、生産物に対して道義的責任を取るのが「世界主義」だと論じているのである。

おそらく、賀川の「社会連帯」(連帯責任)に連動した「世界国家」の構想は、その他の平和主義者の中に在って他の平和主義者とは毛色の異なるものだろう。だが、そこに彼がノーベル平和賞の候補にあげられた理由が存在しているのではなかろうか。

そして、賀川が、この書を記した時期は、「自序」に「大正 10 (1922) 年 2 月 5 日」とあるように神戸での労働争議の終結直後である。

実際、賀川は、「世界国家」の建設の要を争議団に参加した労働者に向かって宣揚し、「軍備縮小と労働組合」『労働者新聞』(大正 10 年 9 月 18 日付)で説いている。

資本主義は、貪婪をのみ教へて互助を教へない。他人と他国民を略奪することを教へて世界互助の仁義大道を説か無い。…それで我等はどうしても此際「世界的国家」の立場から、軍備の縮小を絶唱すべきである。…我等が生産者であるに違いは無い。然し我等は生産者であると共に一方に於いては「世界人」である。…先に本年春閩閩西同盟会が軍備縮小を提議するや軍艦製造業者松方幸次郎氏は、軍備縮小は川崎造船所の縮小を意味するから職工はそんなことを云はないで大いに軍国主義で居れと云ひ残して欧州へ出発した。…日本の労働者は松方氏のやうに自分一人が儲かったらそれで善いと考へるやうな男は一人も居ないのである。自分が失職しても世界人道の為めなら明日からでも喜んで飢えるのである。…軍備縮小の問題は、良心ある国民が絶叫すべき大問題であり、世界的平和を欲する労働階級は全力を尽くして之を昌道すべきである。…我等はどうしても此際「世界的国家」の立場から、軍備の縮小を絶唱すべきである。…我等は生産者であると共に一方に於いては「世界人」である。

賀川は、川崎・三菱造船の労働者に向かって、自らの生産物(軍艦)の用途(戦争)に責任をもたねばならないと説いている。さらに、労働者は、生産物が殺人兵器ならば、身

を切っても資本家の要求を拒否すべきだと論している（註9）。

また、賀川は、「軍備縮小と無産者階級」『労働者新聞』（1921年12月1日付）において、「労働者階級は如何なる苦痛を敢てしても高き理想の下に、軍備撤廃と世界国家の成立の為に努力する。」と繰り返し主張している。

しかし、第二次世界大戦の前夜、賀川が「世界国家」のスローガンを叫ぶ気持ちを封印する時がやってくる。賀川は、昭和15（1940）年に松沢教会での説教の最中に反戦運動嫌疑で渋谷憲兵隊に拘引され巣鴨拘置所に拘留される。この時は、松岡洋右外相（1880-1946年）の要請で釈放された。

賀川は、この逮捕と釈放を契機に史上初の国際平和機構である「国際連盟」（1920年）と決別する信条を表明している（「武蔵野の森より」『雲の柱』昭和15年10月号）。

私は国際連盟に日本が留まっている間、国際連盟至上主義をもって貫いて来た。それで今度の事変に於ても、まださうした思想をのみ抱いていると思はれるのは当然である。私は、しかし、国難を前にして国を愛しないことは出来ない。理想は理想である。

つまり、賀川は、非国民の汚名をかけられ拘留されるという事態に陥り、軍国主義（ナショナリズム）の怒涛の嵐の前に、平和に関する基本姿勢をナショナリズムに大きく転換させた。鶴見俊輔と佐治孝典は、これを「賀川の転向」だと呼び、彼に対する否定的な評価に帰着させている（註10）。

戦後、賀川は、自ら戦争に加担した戦犯であると告白し、戦争協力への責任に対する慙愧の思いを募らせている。その苦悩の中で出会った希望が「世界連邦」であったのである。

世界連邦は、第二次世界中に原子爆弾の開発に拘わったアインシュタイン（1879-1955年）らの科学者が、ナチス・ドイツに勝利するために開発した原爆が広島・長崎に落とされて未曾有の被害をもたらしたことを悔いて大戦後に世界の平和を目指して結成された組織である。日本では、日本人初のノーベル賞の受賞者湯川秀樹（1907-81年）がアインシュタインに依嘱されスミ夫人とともに会長を務めている。

賀川は、日本において世界連邦運動を支援する組織として国際平和協会を1945（昭和20）年9月27日に設立し自ら理事長となり翌年に機関紙『世界国家』を創刊している。

また、小塩完次は、「世界平和は世界連邦から」のなかで昭和23（1948）年に日本世界連邦建設同盟を設立させ、戦後初の首相東久邇稔彦（在任1945/8-45/10）に初代会長を委嘱している（註11）。

その上に、終戦時の日本で取材活動をした『シカゴ・サン』紙の特派員マーク・ゲイン（Mark Gayn、1902-81年）の『ニッポン日記』には、GHQ（連合軍最高司令官総司令部）の左派によって賀川が戦後日本の首相候補にあがっていたことが記されている（註12）。

賀川の世界連邦運動で、彼の背中を押した旧友に北村徳太郎（1886-1968年）がいる。西住徹氏等の研究によると、北村は、はじめ北浜銀行（現在の三菱UFJ銀行の前身）に入行し、在職中に関西大学専門部に入学し同校を明治42（1909）年に卒業し、金子直吉（1866-1944年）の鈴木商店に招かれ、播磨造船所支配人に転任し民主的な会社経営を行い、その後親和銀行（現佐賀銀行）の頭取などに経営手腕をふるい、戦後政界に転身し、

国務大臣（片山哲内閣の運輸大臣、芦田均内閣の大蔵大臣）に就いている（註 13）。

その後、北村は、石橋湛山（政治家、1884-1973 年）とともに日本国際貿易促進会（1954 年）を結成して経済交流からの日中友好関係の回復に乗り出している（註 14）。

弟子の黒田四郎によれば、昭和 24（1949）年、賀川は、「世界連邦日本国会委員会」を創設したが、その際に北村を副会長に任命し、会長松岡駒吉（政治家、1888-1958 年）と顧問の尾崎行雄・幣原喜重郎・佐藤尚武・吉田茂とともに組織作りをした（註 15）。

賀川豊彦は、昭和 35（1960）年 4 月 23 日に東京都世田谷区上北沢の自宅で逝去する。彼の死の床での最後の祈りは、「日本をお救いください！世界に平和をお与えください！」であった。日本と世界のためのキリスト教、これが賀川の未来像（vision）だったのである。

### 第 3 章 賀川豊彦と医療福祉

人が生きていくうえで、衣食住とともに必要なものに医療があることは言うまでもない。にもかかわらず、貧民は、貧困故に高額な治療費を支払えず、みすみす助かる命を捨ててしまうことがある。そこで、教科書の『倫理』のなかで、「さまざまな社会事業をてがけた」と大枠的に記された賀川が取り組んだ社会事業の中でも、とりわけ大きな意義をもつ医療福祉分野の業績について紹介することにする。なかでも、賀川がスラム街に転居した当時、貧民達は病苦に喘いでいた。そこで、彼は、入所当初から無料巡回診療を貧民に施した。

賀川の側近の黒田四郎氏の回想録『人間賀川豊彦』（1970 年刊）によると、賀川が 1909 年に神戸市葺合区の俗称「新川」のスラム街（貧民窟）に入居した際、手掛けずにおれなかったのが貧民に対する医療奉仕活動であったという。また、愛弟子でスラム街での貧民救済活動に尽力した武内勝の回想録『賀川豊彦とボランティア』によると、賀川は自ら医師になる決意を表明したこともあるという（註 16）。

其れも、賀川がスラム街に入居した大正時代には、まだ健康保険制度がなかったことによる。また、賀川自身も当時死の病とされた結核であり、スラム街の貧しい人々への奉仕活動を決意したのも医師から「余命いくばくもなし」と宣告されたことがあった。彼の個人雑誌『救霊団年報』（明治 44（1911）年 12 月付）「事業報告」に次のようにある（註 17）。

伝道、無料宿泊所、病者保護、医薬施療、無料葬式執行、生活費保護、児童愛護、家庭感化避暑、避暑慰安旅行、職業紹介、裁縫夜学校、一膳飯屋天国屋、クリスマス饗宴と慰安会

「事業報告」の中の「医薬施療」は、無料巡回診察のことである。

賀川は、医療奉仕活動に対して並々ならぬ決意で臨んでいた。そして「福音」が訪れた。大正 7（1918）年、彼の無料診療所が「<sup>きりすときょう</sup>基督教イエス団友愛救済所」の名称で兵庫県知事の認可を受けたのである（『新神戸』大正 7（1918）年 10 月 15 日付け）。

賀川を主事に、医師 1 人、看護婦 3 人が当たった。賀川が無料診療所を設けた際、彼の同志の医師<sup>まじまゆたか</sup>馬島備（名古屋大学医学部卒、1893～1969 年）が、無料診療所に着任し貧民への診察・治療に奉仕している（註 18）。



しかし、賀川のスラムの無料診療所での医療奉仕活動には、医師馬島偲の協力もあったが決して順調なものでなかった。なかでも、現実には資金面でも困難を極めていた。妻賀川ハルの『日記』を一瞥しただけでも、賀川が無料診療所の運営での資金の提供に苦心していたことが窺える。『賀川ハル日記』の大正9（1920）年の記事に次のようにある。

一月二十六日(月) 医師看護婦に月給を渡す。九月三十日(木) 救済所の薬代は二百五十四円六銭と云う金額に登るので薬屋も驚く。これでは病院ほどの高であると…。どうしても薬代と医師看護婦の手当と入れるならば五万円いるので中々ではない。これでは三カ月もたてば病院の金は勿論賀川の全財産を皆出しても三月はもてぬ。

さらに、スラムの診療所に病人を装って破落戸（ならず者）が乱入し狼藉をはたらくこともあったのである。彼は、随筆「長屋の南京虫」（『雲の柱』大正12(1923)年六月号）に、当時の苦悩を具体的に披瀝している。

△馬島ドクトルは貧民生活をすると強迫する人が何時でも一人位はあると考へねばならぬと云はれて居ります。ひどい悪漢は無料診療に来て居る数十人の患者の順序を無視して診察を強要します。そして順序の外は診察しないと言へば繃帯を医者に投げつける様な乱暴なことを致します。この種類のゴロツキにかかれば困った人を世話することも嫌になってしまふこともあります。

賀川は、無料診療所が兵庫県知事から認可を受けたものの厳しい現実に直面していた。しかし、それだけ、彼の医療奉仕への切実感は募り、無料診療所から組合病院（当時の名称では医療利用組合病院）の設立、国民健康保険法へと構想を広げていくことになる。

聖路加国際病院名誉委員長の故日野原重明氏（1911-2017年）は、賀川が昭和2（1927）年、神戸での講演会で「健康保険法概念」という題目で、健康保険制度が労働者・貧民に必要であると説いたことを評価されている（註19）。

ところで、賀川の神戸のスラム街の無料診療所は、新聞報道などで日本国中に知れ渡っていった。結果、各地から来神して視察する有志者も出てきた。また賀川の無料診療所を視察して感銘を受け、郷里で組合病院を設立した人物も数々登場してきた。なかでも賀川が蒔いた種の発芽が、加藤佳吉（生没不詳）の島根県八束郡秋鹿村（現松江市秋鹿町）での農民組合診療所の設立である。

賀川は、加藤佳吉について「放浪の旅より」『雲の柱』（昭和7（1932）年11月号）で次のように記している。

△「昭和七年十月」 翌日 私は島根半島の中央に位して、宍道湖を南に受けた秋鹿を訪問した。そして日本最初の組合診療所を見た。その加藤氏が十数年前に、神戸の私の診療所を見て、これを開かれたといふから、私は自分ながらおかしかった。組合長であり村長である加藤君は、熱心な松江聖公会（英国国教会）の信者である。

賀川によると、加藤は、組合診療所を思い立った経緯として、神戸の無料診療所を視察して感銘し、秋鹿での医療活動に対する必要性を痛感したことによると告白したという。

ところで、元島根大学学長の北川泉氏は、1997年9月に島根県松江市で開催されたシンポジウム「地域のくらしと協同を考える—しまねからの発信」の講演会で、島根県における組合病院の成立史を語っておられる。そのなかで、北川氏は、津和野での組合病院の誕生と松江市の秋鹿での組合病院の取り組みについて次のように記している。

これは今でも大きな意味をもっていますが、病院経営です。日本で一番最初に協同組合でつくった組合病院は、今の日原町（現在の津和野町）の青原に大正八年（1919）にできました。青原の大庭政世という当時の組合長は非常に馬力のある人で、協同組合思想も非常に堅固な方でした。その人が大正八年に設立したのが、日本で初めての協同組合立の病院です。そういう病院が島根県の各地にできます。最初は日原ですが、その後、新庄町の秋鹿病院、秋鹿は、今は松江市に入っていますが。それから安来のほうの母里、そして今の吉田村の田井診療所とかです。

当時、診察料は無料、そして薬代と手術代は二割引きということでした。そのうえどうしても入院を必要とし、しかもお金がない人には無料で診療所を開放しました。そういうことをこの時代にやっているんですね。

そもそも、大庭政世（1882-1939年）が、農村医療の先覚者であることは夙に知られている。残念ながら、北川氏は、大正8（1919）年に大庭が島根県津和野の青原で設立した産業組合病院が日本の組合診療所の始まりとしているが、同時期の同県新庄町（現在の松江市）秋鹿での組合病院について大庭の組合病院との拘わりなどについては紹介していない。北川氏は、秋鹿組合病院の設立者の加藤佳吉の名前も失念している（註20）。

因みに、大庭が津和野で創設した組合病院と加藤佳吉が組織した秋鹿の組合病院とには、同一県内の組合病院という点で共通性があるが、両者には人的交流と思想的影響はない。

とりわけ、加藤の医療奉仕の中では、学校の児童に無料身体検査を施していて、賀川が、詩の“おいし”に込めた“こども”への憐憫の情が踏襲され、加藤の医療奉仕でも要として遺憾なく発揮されていたのである。

また、賀川が、医師馬島備の協力を得てスラム街に「イエス團診療所」を設立したのは、大正7（1918）年であり、大庭が津和野青原で日本初の組合診療所を設立した前年のことである。賀川が告知しているように、加藤は大庭の組合病院を視察したのではなく、神戸の「きりすときょう基督教イエス団友愛救済所」を視察して、郷里での組合病院の創設を構想したのである。

因みに、加藤佳吉は、イギリス人宣教師のバークレー・バックストン（Barclay Fowell Buxton, 1860-1946年）で知られる松江聖公会の信徒である。加藤は、島根県松江市のクリスチャン集団の「松江バンド」の有力な会員であり、賀川とはキリスト教の信仰で絆をもつ同労者でもあった（註21）。

以前から、加藤は、島根県にあって当時の松江市郊外に位置していた秋鹿村の農民組合を組織し、そのなかで医療事業を進展させていた。彼は、大正11（1922）年に農村改善を

目的として結成された農村文化協会にも参加していた。

農村文化協会は、『読売新聞』の農政記者だった古瀬伝蔵（1887-1959年）を編集者として大正11（1922）年五月に機関紙『農政研究』（1922～1940年）を発刊している。執筆陣には、当時世に知られていた政治家、学者、行政家、教育家、新聞記者、農業指導者らが登場し、大正・昭和初期の激動する農村問題を各号に特集を組み入れながら、極めてユニークな農政誌として昭和15（1940）年一二月号まで刊行された。

賀川と加藤は、それぞれ『農政研究』第十四号第一号「医療利用組合実例号」、昭和10（1935）年一月一日号に、賀川は「農村防貧策と医療事業」を、加藤は「秋鹿組合と医療事業」を発表している。賀川は、論文の冒頭で次のように語っている（註22）。

日本の死亡率は文明国としては一番高い。…日本が明治初年に比べて、少しも死亡率が下らない主なる原因は、無産者の保健設備の欠如によると考へてよからう。

とりわけ、賀川は、この論旨のなかで農村及び漁村の貧困からの医療不備が死亡率を高める要因であると指摘している。彼は、資産主義下の貧民に対する医療活動は慈善事業としてではなく「農民組合による共同運営しかない」と喝破している。

私の知っているある地方の医療組合の如きは地方の極貧者が結合して、組合病院を結成している。彼等はあまり貧乏なるために、医者が嫌って来てくれなかった。然し、彼等が組合病院を設立するや、医学博士が喜んで村に来てくれるやうになった。そのために村の健康は増進し羅病者率は減り、したがって、村の生産力も増加して来た。

賀川が言及している「ある地方の医療組合」とは、加藤の秋鹿村の組織を指している。一方、加藤は『農政研究』「秋鹿組合と医療事業」のなかで、病院設立の経緯を語っている。

事業開始 大正十三年十二月十八日…医長一、医師一、産婆、看護婦各一名を以て診察に従事したが、創業当初一ヶ月は何事も無経験なりし為焦虜と蹉跎に終始し其の活動も遺憾の点多かったけれど、久しく村内に良医師なく、極度の不安に日夜苦慮した時代は過去となり、親切にして廉価なる病院の診察を何時でも受けられ、殊に従来の悪習慣たる往診先の酒肴を全廃し貧困者に無料診察をし、学校児童に対し身体検査を執行する等、組合員の利益は有形無形共に甚大なるものあり、精神的安定に村は光明の世界に導かる々こと々なつた。

加藤佳吉は、組合病院の活動を貧民への医療奉仕と学童の健康管理にも広げ、秋鹿村の物心両面の再生につながった論じている。賀川が、スラム街の貧民に展開した医療福祉の理想が島根県の一農村で顕現し、その後賀川の組合病院の設立の構想に展開したのである。

戦後に、賀川は加藤の活動を手本にして東京での協同組合病院（現中野総合病院）の設立に奮闘することになる。しかし、現在、加藤嘉吉の農民組合診療所の歴史が、島根県の有識者の間でも忘れ去られつつあるように見受けられることは残念である。

賀川は、戦後、社会保険調査委員（1932年）、労働保健調査会臨時委員（1934年）に委嘱され、政府からも医療分野での助言をおおぐ有識者と目されていた。その際、賀川は、「国民健康保険」の制度化を政府に提言しているのである。さらに、賀川は、わずか6年の間に『医療組合論』（1934年）、『国民健康保険と産業組合』（1936年）、『保険制度の協同組合化を主張す』（同年）、『協同組合保険論』（1938年）、『日本協同組合保険論』（1940年）を立て続けに著している。

パルモア病院名誉院長故三宅廉氏（1903-94年）は、賀川が常々日本の医師に対し、アフリカでの医療に生涯を捧げて、ノーベル平和賞を受けたアルベルト・シュヴァイツァー（Albert Schweitzer、1875-1965年）のような医療伝道者になって欲しい、と語っていたことを回想している（註23）。

敷衍して、賀川豊彦と加藤佳吉とには、医療伝道という立場からの医療福祉という事業という大きな業績があったのである。

## おわりに

現行の教科書の『倫理』、『日本史B』及び『用語集』などの教材の僅かな記述の中から、賀川豊彦の全体像を窺い知ることが出来ないであろう。そこからは、精々賀川が多才な人物で、時代のカリスマ的存在であったことを感受する程度であろう。

日本現代史では、賀川豊彦ほど振幅の激しい評価を受けている人物は少ないといわれる。ある時は、彼をガンジー・シュヴァイツァーと並び数えられる世界の三大聖人と称賛し、一方でキリスト教を看板にした詐欺師・売名家・煽動家と酷評する研究者もいる。しかし、彼が、戦前戦後の社会運動での先駆者であったことに関しては、各自異論はないであろう。

思うに、賀川豊彦とは、現実社会のヒズミからうまれる多岐にわたる課題に背を向けず、日常生活に足場を置き人々と手を携え、様々な困難に立ち向った人物ではなかろうか。

今、「賀川が存命であったら」という仮想現実（virtual reality）を設定するのならば、現在の日本は賀川が生きた時代ほど貧しくはないが、バブル崩壊後の不況の1990年代後半から、中流崩壊と格差社会が顕著になってきていて格差のヒズミは以前より広がっている。

大江健三郎は、「このヒズミから人間を解放するのが、賀川の持っている思想ではなかろうか」と指摘している。まさに、賀川豊彦を再見する意義が見出されるのである（註24）。

『学習指導要領』が掲げる教育の達成目標の一つに「生きる力」がある。公民科の授業の中で、賀川豊彦の生涯と彼が生みだした社会事業を再評価することは、現代社会が抱える諸課題に対して生徒達が主体的・能動的に立ち向かう思想の手懸りになるのではなかろうか。

## 注記

註1 賀川豊彦に関する基本史料は、ほぼ『賀川豊彦全集』（全24巻、キリスト新聞社1964年）に全て収められている。研究書としては、横山春一『賀川豊彦伝』（キリスト新聞社、1951年）が古く、弟子の黒田四郎の『私の賀川豊彦研究』（キリスト新聞社、1983年）と、同志の武藤富男による『評伝賀川豊彦』（キリスト新聞社、1981年）及び、隅谷三喜男の『賀川豊彦』（岩波書店、1995年）等が研究書としてある。国内外でも書物も大量に発刊されている。アメリカ人のロバート・シェルゼン（Robert Schildgen）の『賀川豊彦』は、日本語訳のみならず天津人民出版社から中文訳でも刊行さ

れ、ドイツ人の K.H. シェル『賀川豊彦』は、教文館から翻訳されている。

- 註2 徳島県鳴門市賀川豊彦記念館蔵
- 註3 サンドバークの『シカゴ詩集』(Chicago Poems、1916年4月)の中から、安藤一郎氏の訳(岩波文庫、1957年)の訳文で「びっこ」(片方の足が不自由な障がい者)を紹介しておく。「或るとき私は見た、一人のびっこが 肺を病む残り少ない日々をほそぼそと喘ぎ、うつろな眼で見て、大気を求め、貧民窟の真暗な埃っぽい家の中で 瘦せおとろえた手で絶望の身ぶりをしているのを、田舎の庭に咲いている 丈高いひまわりになったほうがまだまだ、…」
- 註4 陳独秀『独秀文存』(安徽人民出版社、1987年)594頁、「日本賀川豊彦先生(賀川先生是一位良心的の学者、他住在神戸底貧民窟里十幾年、専門出力帮助貧民、前两个月曾来上海調查中国之貧民窟)、在大阪労働問題講演会曾說:『在今日資本家制度的社会、金錢比生命還要貴重。資本家因為致富不惜犧牲労働者底生命。大正六年(1917年)算是最隆時代、然全国增加了医生五万人、看護婦六万人、而人口死亡率還是增加』。又說:『抛文部省研究調查、十五万小学生中、貧民子弟底平均身長、男的矮一寸、女的矮一寸五分:食物不足的人身長及知識都不能發達。第一要叫他們食物充足呵!社会若不叫他們的食物充足、有非難労働者無知識底權利嗎?』。我切望主張工人欠乏知識不能增加工資之人、都注意賀川先生所舉的事實!」とある。
- 註5 『邵力子文集』(中華書局、1985年)上冊、438頁。(1920年11月8日『民国日報』“評論”原載)「陳独秀先生說日本賀川豊彦是一位有良心的の学者、他曾来上海調查貧民窟、…東?君也能發一發良心耶?」。『邵力子文集』下冊811頁(1923年1月7日『民国日報』“通信”)「調查貧民窟、本是有志者可以单独去做的;象日本賀川豊彦君、他即是实行調查貧民窟的一人。」。
- 註6 『賀川豊彦から見た現代』(教文館、1999年)82~85頁
- 註7 『賀川豊彦全集』第7巻(キリスト新聞社、1963年)54頁
- 註8 『賀川豊彦全集』第7巻76-77頁
- 註9 復刻版・大前朔郎編『新神戸・労働者新聞』(日新書房、1969年)
- 註10 鶴見俊輔氏『日本の百年』(筑摩書房、1961年)第二巻「廢墟の中から」149頁、佐治孝典『土着と挫折』(新教出版社、1991年)60頁
- 註11 武藤富男編『百三人の賀川伝』下巻(キリスト新聞社、1960年)
- 註12 マーク・ゲイン『ニッポン日記』(筑摩書房、1963年)昭和21年1月22日の記事
- 註13 西住徹氏『北村徳太郎』(親和銀行、2002年)
- 註14 松尾尊允氏『民本主義と帝国主義』(みすず書房、1998年)504頁
- 註15 黒田四郎氏『私の賀川豊彦研究』(キリスト新聞社、1983年)。
- 註16 『賀川豊彦とボランティア』(神戸新聞総合出版センター、2009年)135頁
- 註17 賀川豊彦記念松沢資料館蔵(東京都世田谷区)
- 註18 鳥飼慶陽氏『賀川豊彦と現代』(兵庫部落問題研究所、1988年)86頁
- 註19 『賀川豊彦から見た現代』228頁
- 註20 向畑十四郎氏「農村医療の先覚 大庭政世氏について」『日本農村医学会雑誌』(1952年)第4号、34-36頁
- 註21 バクストン著・小島伊助訳『信仰の報酬』(バクストン記念霊交会発行、1954年)
- 註22 大阪府立図書館蔵
- 註23 『賀川豊彦から見た現代』62頁
- 註24 『賀川豊彦から見た現代』104頁